

フィヒテの国家理念の歴史的位置

—— フィヒテ『封鎖商業国家論』(1800)

について——

岡 崎 勝 世

目 次

はじめに

一、『封鎖商業国家論』の内容

1. 職能身分制国家
2. フィヒテの現状認識
3. 封鎖商業国家実現のための方策

二、フィヒテの国家理念歴史的的位置

1. フィヒテとフリードリヒ体制の国家
2. フィヒテとドイツ・ブルジョワジー
3. フィヒテと社会主義—結論にかえて—

はじめに

かつて第一次世界大戦後のドイツで「フィヒテ・ルネサンス」について語られたことがあった。^①そして今日もまた同じ言葉が語られている。^②かつての場合はドイツの敗戦及びその後の経済的困難のなかで『ドイツ国民に告ぐ』と結びつけられて、フィヒテが高く評価され、“復活”を遂げたのであった。それに対して今日のそれは、かの講演がなされたと同時期のフィヒテを対象としながらも、むしろ後期の『知識学』の研究を通じて「従来フィヒテを単にカントとヘーゲルとの間の橋渡しとして取り扱ってきた研究の姿勢を根本的に反省することによって、カントにもヘーゲルにも解消されない、否むしろ両者に優に比肩しうるフィヒテの思想の特性を明らかにしよう」^③とするものと報告されている。

しかしながらフィヒテの思想が問題となったのがこれら二度のルネサンスの時期のみだったということでは決してないのであって、彼の思想は様々な時代に、その歴史的情况に応じて様々な位置づけを与えられてきたのである。エンゲルブレヒトによれば、フィヒテはその死の1814年から1840年までは当時の反動的空氣のなかで最初は無視され、やがては危険な自由主

義者或るいは革命家として敵視されるに至った。この時代にはフィヒテはかろうじてブルシエンシヤフト運動に代表される自由主義者の間で彼らの思想的先駆者の一人として支持者を持ったにすぎなかった。続く1840年から1914年の期間ではドイツにおけるナショナリズムの展開とさらにはドイツ統一の実現という一連の事態のなかで、『ドイツ国民に告ぐ』と結合したナショナリズムの英雄・予言者としてのフィヒテ像が成立し、そして広く定着していった。しかしこの間、少数派ではあるが、ラッサールに代表される社会主義者の側から社会主義者・共和主義者としてのフィヒテ像も形成されている。第一次世界大戦中はドイツに於いてもまた連合国側においてもフィヒテは、一方に於いては肯定的に他方においては否定的に、ドイツ・ナショナリズムの代表的理論家として扱われた。大戦後は従来の少数派フィヒテ像が復活した。エーベルトが1919年2月のワイマールの議会での演説で「ドイツ国民の権利を維持し、ドイツに強力な民主主義の基礎を置き、これらを真の社会的精神と社会主義的方法で達成すること」こそ「フィヒテがドイツ国民にその任務として与え

た」ものだと述べている程である。フィヒテが国際連盟思想の先駆者の一人とされたのもこの頃のことである。しかし地方ドイツの経済的苦境が深刻化してくる頃にはナショナリズムの英雄・予言者としてのフィヒテ像のルネサンスがおこってくるのであり、やがてナチズムの抬頭から独裁の時期になると、フィヒテは彼らの思想的先駆者として位置づけられるに至る。皮肉にもフィヒテ思想のナショナリズム的理解の潮流と社会主義的理解の潮流がナチズムという立場で“止揚”されるに至った訳である。大戦後の現在における第二のフィヒテ・ルネサンスについては既に述べた通りである。

さて、以上のようにフィヒテの思想が多様な理解を輩出せしめた理由についてはドイツ史そのものの変化もさることながら、そのような歴史的变化に応じて様々な姿を示し得るその思想内容の多様性に根源が求められなければならないであろう。フィヒテ(1762 - 1814)の思想的生涯については大きくは1799年を境に前期と後期に区分されるが、その後期をさらに1806年を境に二期に分けて把握することがなされてきている。前期のフィヒテは『全知識学の基礎』(1794 - '95)で彼の哲学を確立し、さらにまた、その哲学的根拠上で自由主義或いはジャコバン主義と評価される政治思想を展開した時代である。この時代は彼が「無神論論争」によって1799年イエナ大学を追われることで終わる。後期は、全体としては、ベルリンに活動の場を移したフィヒテがやがてナポレオンによるドイツ支配とそれに続く解放戦争のなかで国民主義・民族主義を展開していった時代とされるが、この後期のうちの第一期(1799 ~ 1806)は続く第二期(1806 ~ 1814)における確固とした国民主義・民族主義の立場——『ドイツ国民に告ぐ』(1808)で代表される——に至る過渡期とされ、この過渡期を代表する著作としてあげられるのが『封鎖商業国家論』(1800)であ

る。この時代は、また、単なる過渡期としてのみではなく、この『封鎖商業国家論』の主張内容からフィヒテが社会主義思想を展開した時代として把握することが、マリアンネ・ウェバーの画期的著作以来、^③定着してきている。結局大まかに言ってもフィヒテの思想は前期の自由主義・ジャコバン主義、後期(1)の社会主義、後期(2)の国民主義・民族主義という諸側面を持っているとされる訳である。^④ドイツに於けるフィヒテ像の多様性は上記のような彼の思想の持つ多様な側面のうちのどの側面に重点を置くかに大きく拘わってきたのであって、どの側面がどの時代のいかなる人によって強調されるかは、それはそれでまたドイツ史の流れそのもの及びそれに対するその人の主体的立場によって規定されてくるものなのであると思われる。

さて、本稿の目的は上記の『封鎖商業国家論』^⑤で展開されているフィヒテの国家理念に一つの歴史的な位置づけを与えることである。彼の思想内容の上記のような多様性を思うとき、勿論、この一冊の書物の分析で彼の思想全体の性格を明らかにできるとは私は思わないし、またフィヒテ理解の歴史のすべてが本書の位置づけを通じて解明しうるとも考えていない。私が本稿で目的としているのは、ただ、フィヒテの思想の一つの基本的性格を歴史的・社会的な観点から指摘することである。また本書を分析対象として選んだ理由はかかる目的から彼の思想に接しようとする時に最も適切な内容を備えているからである。彼は本書において最も歴史的・社会的現実に接近しかつそれに即して彼の思想を展開しており、従って本書は彼の哲学をかかる側面から点検できる内容をもっているからである。しかしまた他方上述のようなフィヒテの思想の多様性の背後にある一つの一貫した性格が本書の分析を通じて摘出できるのではないだろうかと考えたことも、実は、本書に注目した理由の一つであって、それを通じて私なりの

フィヒテ像ができればということも考えている次第である。^⑥

一、『封鎖商業国家論』の内容

本書は第一編・哲学、第二編・現代史、第三編・政策論に分かたれている。第一編では「理性国家に於いては商取引に関して何が合法的か」(S. 399)が理論的に追求され、定立としての理性国家の理念が示される。第二編はこれに対する反立としての「現代史」＝歴史的現実の世界または感性界の状況が分析され、第三編では両者の総合としての政策論、即ち理性国家の自己実現への具体的方策が追求されるのであって、ここに人はフィヒテ的な弁証法を承認することができる。^⑦彼にあってはこのように何よりもまず純粹理性から演繹的に導入される普遍妥当的国家理念の追求が根本におかれ、そしてこうした理念が現実＝非我をのり越えて自己を実現していくという観念論的理論構造をとるのである。ただ、ここではその理念内容の普遍妥当性そのものの検討をするということとはできない。本稿では、逆に、普遍妥当性を持つものとして提出されたフィヒテの理念そのものの歴史的品格を吟味したいからである。そのような観点から以下、まず本書の内容の要約をしたい。

1. 職能身分制国家

第一編、哲学では彼の理論構造からは上述のように普遍妥当の品格を持つものとしての理性国家の具体的構想が提出される訳であるが、以下順次その内容を見てみよう

まず、彼がその理論の根本に据えているのが所有権＝財産権理論である。ここで彼は従来の所有権理論を批判しつつ彼独自の理論を展開する。フィヒテの哲学は本来自我の自由を出発点にした哲学であり、ここでも彼はあくまで自由な人格の合目的的な活動に所有権の根拠づけを求

めている。即ち彼によれば従来の考え方では「最初の根源的財産が一つの物の排他的占有に定立される」(S. 441)とするがこれは誤っている。真の所有権はフィヒテに依れば、「一定の自由な活動に関する排他的権利ということに定立」(S. 441)されるべきであって、従って「すべての所有権の根拠は、我々にのみ留保されたある自由な活動から他の人々を排斥するという権利に定立せらるべきであって、客体の排他的占有ということに定立されるべきでは決してないのである。」(S. 444)しかもこの所有権は本来身体(Leib)権、生存権などならんで人体の不可譲の原権(Urrecht)なのであり、これら原権の調和ある実現のために人間は国家市民契約を結び、ここに国家生活に踏込んだものだったのである。^⑧従って彼の構想する国家では全ての構成員は上の意味での所有権(＝財産)を所有することになろう。^⑨

このようにして成立してきた国家は、彼に依れば、次のような職能身分制的構成を持つべきであった。即ちまず「三つの身分が国民の基本的構成部分」(S. 405)をなすべきである。三つの身分とは「生産者身分」(Der Stand der Producenten)、「職人身分」(Der Stand der Künstler)、及び「商人身分」(Der Stand der Kaufleute)である。生産者身分は「自然生産物の獲得」(S. 403)を任務とする人々でさらに農民、疎菜作り、果実造り、造園師、牧人、漁夫などに下位分類することができる。職人身分は「人間的目的のためにこの生産物をそれ以上に加工する」(Ebenda)ことを権利・義務とする人々であってこれらの人々もまた下位の様々な職種に分類される。商人身分は生産者及び職人にかわって両者の間の交易をおこなうために両者の間にはいり込む人々である。またこれらの基本的三身分の他に国家に於いては「官公吏」(S. 425)が任命されなければならない。即ち「専ら法律の執行と公的秩序の維持とに従

事する人々、次に専ら公共教育に従事する人々、最後に武術を励み、内外の仇敵の暴行対して国民を防衛する準備を常に整えている人々が任命されねばならない。」(S. 424)これらの「政府職員及び教職や軍職」(S. 405)の人々は上記の「これら基本的構成部分のためにのみ存在する」(S. 405f)にすぎないことはいうまでもない。

これらの諸身分間にはそれぞれ他の身分の職分を決して犯さぬという消極的契約とともに、おのおのが自己の職分及び義務を正しく遂行するという積極的契約が結ばれている。即ち生産者は単に自己の必要量のみでなく全身分の必要量の生産物を供給すること、職人身分は必需品について品質を確保しつつ正しい価格で供給すること、商人身分は後述するような公定価格に従って商品の売買をおこない決して暴利をむさぼることをしないこと。また官公吏は全体の調和的發展のために職分をつくすことが彼らの義務なのである。

さて以上のような職能身分制国家を実現するにあたって国家はいかなる「合法的」任務を負うべきかが次に問題となるであろう。

まず所有権(=財産権)に関しては「人各々にまず彼のものを与え、まず彼に財産を得しめ、しかる後に彼のこの財産状態の保護をなすという事が国家の本分である」(S. 399)とフィヒテは主張する。そもそも「自由なる行為の範囲は……個々人の間の万人と万人との契約によって分かれたれ、そうしてこの分割によって財産というものが成立する」(S. 402)ものなのであるが、しかしこの分割そのものの本来によって立つべき原則は「すべての人があまねく可能である限り快適に生活しうるように分割が行なわれねばならぬ」(S. 402)ということだったのである。しかるに現に存在する社会に於いてはこのような原則をふまえた分割が行なわれてはいない。こうした現実の不平等を前にして国家は何

をなさねばならないのか——このような現実の不平等に国家が干渉し、国家がまず上の基準に従って正しい分割を強権的に実現し、しかる後に「この財産状態の保護をなす」こと以外に方法はないとフィヒテは考えるのである。¹⁰⁾

次いで職能身分制国家を実現するにあたっての国家の合法的任務が追求される。ここでは「農業を免ぜられる市民の数が、生産者の数や土地の肥沃度や農業の状態に従って、国家に依って計量されねばならぬ。」さらにその計画に従って「国家が……諸々の職に専心してもよい人間の数を一定に制限」(Ebenda)することによって国内の分業体制の調和・完成を実現しなければならない。この際、もちろん市民の基本権を犯すことなく、また全ての人があまねく可能である限り快適に生活しうるという原則の上で計量すべきなのであって、従って生産物の品目に関しても国家はまず必需品の確保ができて後にはじめて奢侈品の生産にむかうよう指導すべきである。また決して一部の人間に富が集中することがあってはならない。理性国家にあっては「同胞市民の誰か一人が必需品を所有していなかったり、その支払いができなかったりするのに、一人の人が無くてもすませる物の支払いができることは正に不法である」(S. 409)からである。

国内に於ける公取引に対して国家がいかなる任務を負うべきかという問題に関しては、フィヒテが最も重視するのは公定価格の設定ということである。フィヒテはそもそも価値の本質については「物相互の相対的価値の尺度は、人がそれらの物によってその間は生活しうる時間である」(S. 415)といい労働価値説をとらない。従って彼に於いては価値を定める基準になるものとして求められるのは「国民の一般的承認に従って、人が各々その生活のために持つべきでありまた持たねばならぬもの」(S. 415f)であり結局それは「パン食になれている諸国民の

間では疑いもなくパン」(S. 416)であり、究極的にはパン用穀物である。こうしてパン用穀物を基準として食糧品をはじめとした商品全体の価値が定められていくことになる。そして国家はこうしたフィヒテの価値論に従い、^①また「全ての人々が平等に、快的に生活するということ」(S. 417)を基準にして公定価格を決定する責務を持つのである。即ち国家は「すべての人々がそれから栄養を取るためと、そしてその残りのものと彼らの生活にふさわしい他の需要品とを交換するためとに、丁度それだけに見合う穀物」(S. 418)＝価値を所有しようというにあらかじめ計量しなければならない。そのうえで「公取引にもたらされる一切の商引の二重価格(購入価格と販売価格を指す、引用者)を、政府は設立せられた根本命題にふさわしい、あらかじめなされた計量に従って法律によって規定し、刑罰をもってこれを監視しなければならない。かくして今や始めて各人には彼のものが…保証されるのである。」(S. 419)このような国家による経済の統制及び計画的運用が実現されれば投機や不正な手段による蓄財ということはあり得なくなるし、そこでは貨幣価値の変動ということもあり得ないであろう。貧富の差もまたあり得ずここに真の平等が実現するであろう。「この国家においては、すべての人は全体の公僕であり、その代り全体の財に対する彼らの正当なわけまえを獲得する。何人も特に富むことはできないが、又、零落する人もあり得ない。すべての個人には彼等の状態の継続が保障され、それによって全体にはその平穏均斉な継続が保障される。」(S. 419)

さて、最後に、以上のような内実をもつ国家を実現するにあたって考慮されるべき問題が一つ残っている。それは外国人との商取引の問題である。というのは外国人はこの国家の政府の公定価格に束縛されないし、またこの政府も外国人の生活保障まで考慮に入れて公定価格を定

めるわけにはいかないからであり、しかも外国人の行なうこの国内での商業活動は計量の外にあって国内の計画的経済運営を不可能にするからである。この問題に対するフィヒテの回答は以下のとおりである。「国家における一切のとりひきは上に示された仕方ですべて秩序づけられねばならず、又、この秩序づけが可能であるためには、外国人の秩序づけられない影響は遠ざけられねばならず、かくして理性国家は、それが法律と個人との封鎖的な国であると同時に、絶対に、封鎖的商業国家なのである。すべて人間はその国の市民であるか、それとも市民でないかのどちらかである。同時に人間の活動の一切の産物は国家の取引範囲に属するか、それとも属さないかの何れかである。」(S. 420f)こうして国家は商業的に封鎖され、「外国人との一切の取引は臣民らには禁じられ、不可能とされねばならない」(S. 419)のである。

2. フィヒテの現状認識

第二編・現代史では上述の理性国家の理念に対する反立としての現実に関するフィヒテの認識が叙述される。

フィヒテの現状認識の中心は近代における国家と経済の関係の矛盾ということである。彼は、まず近代国家の発生過程を中世から説きおこして次のように言う。中世に「新しく起ったキリスト教的ヨーロッパの諸民族は同一の国民と考えられる。彼らはゲルマンの森林に起源を持つ同一の血統と同一の根源的な習慣や考えとによって統一されていて、西ローマ帝国の諸地方に拡大して以後は尚その上に同一の共通の宗教の現身の元首に対する同一の服従とによって結合された。」(S. 450)このように中世ヨーロッパは血統、習慣、宗教などによって一つに結合されていて中世の諸民族は「通常人間を分離するもの、即ち国家組織というものによって分離

されていなかった——彼らはそれを実際に持たなかったのであるから」。(S. 451)従って中世の諸民族が「同一の国民であると自らをみなし、かつ振舞ったということ、これらの諸民族が相互に混合し、旅行し、商業を営み、また軍職についたということ、及び誰もが他人の領域にやって来ていてあたかも故国にあるかのように思い込んでいたことに何の不思議もないのである。」(Ebenda)

ところがここに法的・政治的变化がおこる。「ローマ法の制定、および皇帝(Imperator)に関するローマ的な概念を近代の諸君主と皇帝(Kaiser)……とに適用することによってはじめで……固有の意味での政治的な概念および諸制度が普及するに至った。即ち農奴や臣下や封建領主に対する関係が漸次に臣民と彼の官庁および彼の裁判官との関係に転化したのである。」(Ebenda)この新しい変化の先頭を切ったのがフランスであった。この結果「今やはじめに諸民族は国家組織というものによって分割された。この分離は宗教改革のために従来キリスト教教会を一つの全体に統合していた教権が失墜したことによって一層容易となったのである。かくの如くにして近代諸国家が形成されたのである。」(Ebenda)この近代国家は法的には一つの封鎖地域を形成しており、従って近代ヨーロッパは中世におけるような一つの世界をなすのではなくて、近代国家の数だけの封鎖的法地域の集合体となっているのである。

他方、ヨーロッパの中世以来の経済史の歩みには上と異なった特質があるとフィヒテは主張する。まず中世では「キリスト教ヨーロッパが上記のような統一をなす間に、とりわけ商業組織もまた形成された。」(S. 452)本来「同一の国民は皆交り合って商業を営まねばならない。キリスト教的ヨーロッパが一つの全体であったから、従ってヨーロッパ人相互の取引は自由でなければならなかった。」(S. 453)即ち政治的に一つのものであった中世のキリスト教ヨー

ロッパは同時に一つの「巨大な商業共和国」(S. 472)でもあったのであり、中世的政治形態と中世的経済は適合的關係を保持しつつ発展したものと言える。中世に於いて発生した金貨・銀貨という「世界貨幣」(S. 455)はこのような巨大な商業共和国の貨幣として成立してきたものである。

このような中世的な巨大な商業共和国としてのヨーロッパは、フィヒテに依れば、近代まで何らの変更を受けることなく存続してきている。というのは近代諸国家は上述の世界貨幣によって貿易を行なうだけでなく、また自国内での徴税制度もこの世界貨幣に基づいて組織しているからである。この事実が示すことは近代国家そのものは中世的な一つのキリスト教的ヨーロッパを分割した結果成立したものであり、政治的・法的には一つの封鎖的体系をなしているのに対して、近代ヨーロッパには依然として中世以来の巨大な商業共和国が存続しており、それがまだ近代国家によって分割・封鎖されていないということに他ならない。そしてこうした近代における国家と経済との不整合な関係が、フィヒテのみるところでは、様々な問題をひきおこす根源なのである。即ちこの結果「取引の無政府状態」(S. 453)がひきおこされ「取引する公衆内部の万人と万人との涯しなき一つの闘争が購買者と販売者との闘争として成立する。」(S. 457)近代国家は世界貨幣の所有高をもって自己の国力の指標としているため、このヨーロッパという商業共和国の中の世界貨幣のうちどれだけ多くの割合を自国が占めるかをめぐって闘争する。これらの諸対立は国内の諸矛盾を激化させ、また国家間の戦争をすら引き起こすに至るのである。^⑫そしてこれら全ては上述の近代における国家と経済との不整合な関係に起因している以上、それを解決する方策はただ一つしかない。即ち「後に附加した他の大陸に於ける植民地と商業地とをこめてのキリスト教的ヨ

ヨーロッパ全体が今なお一つの全体であるならば、すべての地方相互の通商は、本来そうであった様に、無論自由のまゝでなければならない。だがこれに反して、*もしキリスト教的ヨーロッパ全体が相異なった政府に統治されている数個の国家に分かれているならば、それは同様に全然封鎖された数個の商業国家に分かたれなければならないのである。」(S. 453)

3. 封鎖商業国家実現のための方策

第三編・政策論では上述のような理念と現実の総合としての理念の自己実現への具体的方策＝政策論が展開される。

フィヒテの構想した封鎖商業国家の経済は自給自足の経済である。従って封鎖商業国家を実現するにあたってまず問題となることはそのような経済を営めるまでに国内の経済体制を整備することである。フィヒテに依れば、自給自足の体制を成立させるためにはまずそれを可能にするところの「自然的境界」(die natürliche Grenze、S. 469)の実現を急ぐべきである。封鎖商業国家には現在ある諸近代国家が全てそのまま移行できるという訳ではない。近代国家の境界は「盲目的偶然によって規定されたもの」(S. 481)であって決して「生産的独立性と自己充足性」(S. 480)とを保障するものとしての自然的境界を自己の境界としている訳ではないからである。また、自然的境界の実現とならんで、従来輸入に依存していた品目についてはこれを自国生産に切り替えるか自国生産が不可能な場合は代替品の開発をし、それも不可能なら使用中止にまで進めるなどの措置を推進すべきである。そしてこれらの努力をした上で、とらるべき決定的方策としてフィヒテが提出するのが次の方策である。「すべての世界貨幣、い
いかえれば全ての金銀が流通外におかれて、新しい国内貨幣、い
いかえれば国内に於いてしか

通用しないけれども、しかし国内に於いては排他的に通用するであろうような一つの貨幣とおきかえられるべきである。」(S. 485)このことによって近代国家は決定的にヨーロッパという巨大な商業共和国から自己を分離しかつ封鎖することになり、中世的経済体制を打破して自己に適合的な経済体制を実現していくことになるであろう。

さらに進んだ政策としてフィヒテは様々な政策を提唱している。国内貨幣の制定と同時に国家が対外貿易を独占し、市民には一切これを禁止する。国家は、さらに、外国との貿易そのものを漸次縮少し、やがてこれを消滅させていく措置をとっていく。また国家が独占した世界貨幣については自国の富強のために様々な効果的運用をはかる。例えば「その貨幣の富の力で、戦備を十分に整えて、外国の補助手段と諸とをば……十分に多く購入したり備ったり」(S. 502)することで容易に自然的境界の実現がなされるであろう。というのはこのような強力な「政府に向っては抵抗がなされ得ない程であるし、またその政府は流血の惨を見ることもなく、……その意図を達成することができ、かつその行動は戦争というよりはむしろ占領行軍である程である。」(Ebenda)からである。またこの富の力は占領地住民の掌握・慰撫のためにも使用されるべきである。封鎖商業国家の市民の外国との直接交渉は一般的には禁止されることが原則とされるべきであって「封鎖商業国家から旅立たねばならぬ者はただ学者および芸術家のみである。」(S. 506)これら学者や芸術家は官費によって海外派遣され人類全体の学問・芸術の発展に寄与するべきである。¹³⁾

封鎖商業国家は以上のように経済的に自己を封鎖することで自給自足体制を実現し、国内に於いては市民の自由・平等を実現することになるが、同時にこのような封鎖商業国家の実現は新しい状況を産み出していくことになる。そう

した新しい状況についてフィヒテが特に強調するのは真の世界平和の実現と国民的個性の形成という二点である。即ち封鎖商業国家の内実を具備した国家には「自らの自然的国境を越えるような領土の拡大から何らの利益も生ずる訳がない」(S. 483)のであり、このように完全に自己自身に於いて充足している国家間には戦争をひきおこすような要因は存在しないのであって、こうしてここに真の平和が実現することになるのである。また、「このようにして封鎖された国民のもとにおいては、即ち成員のみが相互に交流し外国人とはまれにしか交流せず、上述の諸方策によって特殊な生活や習慣を保持し、祖国及び一切の祖國的なものとを忠実に愛する国民のもとにおいては、直ちに高度な国民的榮譽と、鮮やかに特徴づけられた国民性が成立するであろうことは明らかなことである。その国民は全く異なった新しい国民となるであろう。」(S. 509)^⑭

二、フィヒテの国家理念の歴史的位置

『封鎖商業国家』の位置づけに関しては、既にふれたように、社会主義思想を展開したものとするものが最も一般的であるといつてよいであろう。上述のような計画・統制経済、分配の平等、搾取を許さぬ労働の社会的分業の構想などの諸点がこうした評価の共通の根拠となっている。そしてその場合「フィヒテは、決してマルクス主義型の社会主義者ではないが、しかし最初の近代的社会主義者の一人として記されねばならない」^⑮ということもまた共通の理解となっているといえよう。しかし他方、マルクス主義とは相違した社会主義思想とはいっても、さらに一歩進んでその内容をどう規定するかはフィヒテの主張内容のどの点に重点を置いて理解するかによって様々である。マリアンネ・ウェーバーはマルクス主義のもつ唯物論的・科学的社會主義という性格に対してフィヒテのその

もつ認識論的・倫理的性格を強調して「倫理的社會主義」^⑯と規定し、南原繁氏もまた『知識学』を基礎とした哲学的思弁の結果であることを強調してこれに『学的社會主義』とも^⑰また人間の使命としての文化活動というフィヒテ独得の思想との関係を強調して「文化的社會主義」^⑱とも規定している。アリスはフィヒテにとって最も重大であったのは農民問題であったとの認識に基づいてフィヒテの構想を「農民的社會主義」^⑲の構想と規定している。バクサのように民族主義的要素と社会主義的要素に注目してナチズムの思想的先駆者としてのフィヒテ像を提出しようとするものすらある。^⑳

しかしこれらの一般的理解とならんで、或るいはその理解の内に含まれる形で、本書の歴史的位置づけに関して二つの重要な指摘がなされてきている。その一つはフィヒテの『封鎖商業国家論』は現実には「フリードリヒ体制の国家の理想像をえがくものだった」^㉑として絶対主義国家プロイセンとの結びつきを強調し、ここにフィヒテの思想の位置づけを求めようとするものであり、他はフィヒテの思想をドイツ・ブルジョアジーの立場を代弁するものとして位置づけようとするものである。^㉒

これらのフリードリヒ体制の国家の理想像、ドイツ・ブルジョアジーを代弁する思想、ドイツ最初の近代的社會主義思想といった評価は互に他を排除しあう性質のものではなく、また、互に関連しあっているものであるが、これらの関連をどう考えるかでフィヒテ思想の位置づけもまた大きく相違してくることになるであろう。そこで以下ではこれら三点に関して検討を加えることでフィヒテ思想の歴史的位置づけを考察していくことにしたい。

1. フィヒテとフリードリヒ体制の国家

ここでは封建制度及びフリードリヒⅡ世(大

王)に代表される絶対主義国家とフィヒテの理念がどのような関係を有しているのかという二点に問題を絞って考察してみたい。

まず、フィヒテの立場が断固たる反封建の立場であることについてはいささかの疑いもないであろう。既に紹介したフィヒテの所有理論が土地所有権にその法理論的根拠を置く封建制度に真向から対立し、これを否定するものであることは明らかである。さらにまた彼の構想する封鎖商業国家に封建貴族が入り込む余地がないことも明らかである。否、それどころではなくてこの封鎖商業国家は、フィヒテはそうとは明らかに述べてはいないが、実は封建的土地所有制度を破壊することなしには決して成立しないものである。彼は所有権の実現に関する国家の任務について「人各々にまず彼のものを与え、まず彼に財産を得しめ、しかる後に彼のこの財産状態の保護をなすという事が国家の本分である」(S. 399)と規定していた。彼はここで人間の基本権として所有権を主張しはするが、他方経済活動に国家の干渉が及ぶことには拒否の態度を示す自由放任主義を批判しつつ、国家がまず最初に彼のものを与えなければならないといっているのである。この行動を国家が当時の歴史的現実のなかで実際におこなうとすればどうなるであろうか。——それはグーツヘル・農民関係を国家権力によって破壊し、封建的土地所有を解体して農民の手に土地をまず与え、しかる後にこの土地の保護を国家がおこなうということ以外ではあり得ないであろう。そしてフィヒテはこのようにして形成された小土地所有農民を基礎とした新しい職能身分制国家を構想したのである。フィヒテのこの構想は、実は、人口の八割近くを占め、また当時なお封建的束縛のもとにあったドイツの農民に対しフランス大革命期にジャコバン派のおこなったと同様の社会的変革を約束するものだったのである。ここにはまだジャコバン主義者フィヒテが生きて

いるのである。彼は既に述べたようにその死後1840年頃までは危険な革命家として敵視されていたといわれるが、当局が彼を敵視したのは上のようなフィヒテの立場によるものなのである。

さて、次に絶対主義国家に対するフィヒテの関係について検討してみたい。かつてのジャコバン主義者フィヒテの時代には彼の反封建と反絶対主義とは固く結合していた。例えば、彼の若き日の政治パンフレットの『思想の自由を従来抑圧してきたヨーロッパ諸侯に対する思想の自由返還要求』(1793)²²⁾のなかで彼は言論・思想の自由の問題を中心に据えつつ絶対君主政治に対する激しい批判を展開していた。²³⁾また『フランス革命に関する公衆の判断を訂正するための寄与』(1793)ではこうした絶対主義国家に対する革命運動について「一国民かがその国家体制を変革する権利は、一つの不可譲の、失うわけにいかない人間の権利である」²⁴⁾としてこれに原理的支持を与えかつドイツ人公衆に対して同じ態度をとるようと呼びかけていたものであった。しかるに『封鎖商業国家論』はシュトリュエンゼーというプロイセン王国の大臣に献呈されている。即ちかつてはフィヒテが激しく批判し、またそれに対する革命運動を支持したところの絶対主義国家の一典型であったプロイセン王国の当局者に本書は献呈され、かつ嘉納されたのである。この事実はフィヒテの絶対主義国家に対する一定の態度変化を推測させるものである。反封建の態度は不変であるが反絶対主義に微妙な変化が生じてきていることを予測させるものである。そしてこのような視点に立つとき、まず問題となるのはこの時期に於けるフィヒテの国家論の変化であろう。かつての彼は国家的政治生活は人間の絶対的価値目的には関与せず、かえって完全な社会の上に、一定の条件のもとにおいてのみ存立するところの、そしてやがて消滅すべきであるところの、一つの単なる手段としてしか国家を位置づけていなか

った。²⁵しかし『自然法の基礎』(1796)に於いては国家は単なる一手段ではなくて国家市民契約を通じて成立するところの、「共同的な意志以外の意志であることが端的に不可能であるというような意志」即ち「そこに於いては私的な意志と共同的な意志とが総合的に統一されているような一つの意志」²⁶の担当者としてあらわれてくる。国家はこのような共同的な意志の担当者かつ強制的権力の所有者となり、国家市民の権利状態の保障は国家によって遂行される。従ってここでは国家は消滅すべきものではないどころか、権利状態は国家によってのみ可能なのであり、国家は『封鎖商業国家論』に於いて描かれたような様々な活動を通じて市民の諸権利の実現及び保証をしなければならぬ責務を有するものとなってきているのである。²⁷

以上のようなフィヒテの国家論の変化の原因の一つはフランス大革命の現実的展開にあったと考えられる。フィヒテは本来フランス大革命及び革命一般の擁護者としてドイツの思想界に登場して以来フランス大革命の発展と深い拘わり合いを維持しつつ自己の思想を展開させてきたのであった。そしてこの国家論の変化の背後にはジャコバン派独裁(1793~'94)の期間に国家がなし得た巨大な役割に接したというフィヒテの歴史的体験が存するのであり、その結果彼は従来の極端ともいえる個人主義的国家観を克服して国家の上述のような積極的役割を承認するに至ったのであると考えられる。²⁸

さらにもう一点注意したいのはこの期の彼の統治形態論である。彼は上記『自然法の基礎』で統治形態論についても考察しているがそこでは君主政の形態と貴族政(=共和政)的形態の二つを「合法的」なものとして承認するのみなのである。²⁹彼は民主主義を無政府主義にも通ずるものとしてこれを排し、³⁰また上記の兩者のうちどちらを選ぶかに関してはむしろその国民の文化的段階によるものと考えている。即ち「一

部は厳格な合法性にまだ慣れていない国民の、または国民一般の考え方のゆえに、また一部は他の諸国民に対する関係に於ける無権利・無法状態のゆえに政府がより大きな力を必要としているところでは君主政を、しかし適正な憲法がすでに生命を持ち……法がただその内的重要性によってのみ作用するような状況の存するところでは共和主義的体制を選ぶべきである」³¹と述べているのである。そしてさらにこの君主の地位に関しては世襲制すら承認され、³²また三権分立には反対の態度が示されており、しかも議会制度については触れられることがない。³³

以上のようにこの時代のフィヒテは、なお人間の自由をその哲学の基盤かつ目的とし、また従来の契約論的立場、革命権の承認などの諸点は変更していないとはいえ、国家を人間の法=権利状態が実現するための必然的形態としてとらえるようになり、その国家に強大な権力を承認した。しかもそうした国家に於ける政府・統治の形態については彼は世襲の君主政を承認することすらおこなったのである。否、単に承認するのみでない。彼が先にあげた共和主義的体制を選ぶべき場合の諸条件がドイツに於いて実現していないことは明らかである以上、ドイツは君主政を選ぶべきなのである。それだけではない。フリードリヒ体制の国家即ちプロイセンに関していえば、その官僚組織は規律の厳格さと職務遂行の忠実さ・迅速さできこえ、またその安上がりなことでも有名なものであったし、しかもこの官僚組織の頂点に立つ君主は自らを「国家第一の下僕」として位置づけており、これらはまさにフィヒテの述べていた基本的三身分のためにのみ存在するものとしての官公吏像に一致すると言えるのであろう。またフリードリヒ二世(大王)は重農主義的諸政策によって農民保護をすすめたことも周知の事実である。彼がオーストリア継承戦争・七年戦争などを通じて行なった領土拡大すら、フィヒテがそう明

言している訳ではないが、その自然的境界の理論の実現として位置づけることが可能なのである。こうした意味では、たしかに、彼の構想は「結局においては十八世紀末におけるプロシヤの国家的理想の一表現に他ならなかったのである。³⁴⁾」そしてまたこのことがフィヒテをしてプロイセン国家の上からの改革に期待を抱かせしめるに至り、かくして上述のように本書をシュトリュエンゼーに献呈せしめるに至った理由であったとも考えられる。

しかしまた他方彼の立場が徹底的な反封建の立場であったことも決して忘れてはならないのであって、実はこの反封建の立場から彼はフリードリヒ体制の国家に接近していったのである。この点では決してフィヒテの構想はフリードリヒ体制の国家とは適合的關係をもたず、むしろそれとは基本的に対立する筈のものなのである。なぜならプロイセン国家が一貫してユンカー(=Gutsherr)をその国家的支柱としてきたこともまた周知の事実だからである。従ってこのような基本的対立点を持ちながらフィヒテがプロイセン国家に接近し、かつその国家的理想の一表現を与えたとまで評される思想を展開するに至ったのは何故かが問われねばならないであろう。この問題については、しかし、節をあらためて考察したい。

2. フィヒテとドイツ・ブルジョワジー

フィヒテの構想した封鎖商業国家が全て有産市民によって構成されるという意味では、確かに彼をドイツ・ブルジョアジーの思想的代弁者とするには理由のあることであってこのこと自体には私は異を唱えるものではない。しかしこの場合の“ブルジョアジー”はたして後のナチズムの時代において「経済面で成功する可能性に絶望するや否やその固有の個人主義を放棄³⁵⁾したところのブルジョアジーに直結するも

のだったのだろうか。或るいは後にドイツ国民経済を成立せしめていくブルジョアジーに直結するものなのであろうか。³⁶⁾即ちこの“ブルジョアジー”がドイツ資本主義の担い手たるブルジョアジーに直結していくものなのか否かが検討されねばならないであろう。

まずこうした視点からフィヒテの価値論を検討してみよう。彼は先にも紹介したように価値の本質を人間がその物によってその間は生活する時間に求め、具体的にはパン用穀物にその基準を求めた。全ての他の物の価値もこれを基準にして見積られる。「例えば肉は食糧品としてパンよりも一層高い内的価値を持つ。何故なら肉の少量は多量のパンと同じだけ永く栄養を給するものであるから。人が平均して一日の中に栄養を得るところの或分量の肉は、彼がその日の栄養のために用いたであろうだけの穀物の価値がある」(S. 416)というわけである。商人身分や職人身分などのように直接食料品の生産に携わらない人々の労働に対する支払いもまたこれによって測定される。即ちこの場合には「労働者は労働時間生活することができなければならぬ。さらに、もしその労働のために修業期間が必要な場合には、なおこの期間が計算され、そしてそれが彼の労働生活に分配されなければならない。故に彼は、その期間唯パンだけで生活するとしてその際用いたであろうだけの穀物を、彼の労働の代償に得なければならない」(S. 416)のであってこれが彼の労賃となり、この労賃の分だけその商品は価値を高めることになるのである。これらの計算は、勿論、国家によってなされるが、その場合既に紹介した快適な生活という基準も当然考慮に入る訳である。フィヒテの「この価値が交換価値ではなくして使用価値であることは余りに明らか³⁷⁾」であり、「その本質上、質的現物経済的な規定の上に立つもの³⁷⁾」であってこの点にフィヒテの理論の歴史的性格を見出すことができるであろう。

また彼の価値論と結合している貨幣論についても同様の事がいえる。彼は上の価値論の結果として当然ながら貨幣自体にはそれに固有の価値を認めない。彼は貨幣としての「金属の価値がただ単にその価値に関する一般的同意だけに基づくものである」(S. 455)とし、貨幣価値の変動については「世界貨幣の商品に対する価値が輿論以外には何ら他の保護を持たないという。正にそのために、その割合は輿論の如く変り易く恒なきものである」(Ebenda)と説明する。³⁸ フィヒテに於いては貨幣は価値への内的関連を失っており、単なる商品の代表券にすぎないものとなっているのである。封鎖商業国家における国内貨幣は世界貨幣のように輿論ではなく国家による保障を受けているがゆえに安定した貨幣たりうるという彼の議論も、貨幣上の性質を前提としている。そして封鎖商業国家においては「貨幣の総量は商品の総量を代表し、商品の総量だけの価値がある」(Ebenda)のであって、従ってこのような貨幣を所有することの意味は国家内に存在する貨幣の総量に対する自己の所有貨幣の割合に応じた請求権を国家内に存在する全使用価値に対して所有しているということに他ならない。即ちこの貨幣は資本たり得ないのである。フィヒテの価値論・貨幣論は質的現物経済の歴史的段階を起点として発想されたものであり、かつ資本主義的再生産過程を予想していないのである。

先に紹介した彼の経済史に関する基本認識、即ちヨーロッパは中世以降当時までもなお「巨大な商業共和国」であり続けているという認識もまたこの事を裏書きする。当時はイギリスではすでに産業革命を経て資本主義的發展が急激におこなわれていた時代である。それにも拘わらず、経済史的にはフィヒテは中世と近代をまだ区別し得ていないのである。そこから自由主義貿易論を過去のものとなった中世的原理に基づく反動的議論としてうけとり、矛盾するもの

としてこれを退けるということすらなされるのである。³⁹ 経済的に近代国家は自己を封鎖すべきであるというフィヒテの議論は場合によってはフリードリヒ・リストにおける自由貿易論批判及び保護貿易の主張に外見上の相似を示すが、しかし両者の立論の根拠は決定的に相違しているのである。即ちリストが踏まえているのがドイツの資本主義的發展であったとすれば、フィヒテのそれは「ゲーテのウィルヘルム・マイスターの遍歴時代に現われるような中世的手工業者経済体制」⁴⁰に他ならなかったのである。たとえフィヒテが近代資本主義の害悪をフランス革命の現実などとの接触を通じて察知していたとしても、それを彼はまだ「商業」の害悪としてうけとめ、「商業」の封鎖によってこれを克服しようと考えたのである。彼の構想が結果として保護貿易主義或いは国民経済形成のプランのように見えたとしても、フィヒテ自身に即していえば、ドイツの資本主義的發展と結合する意味での国民経済の創出策とは意識されていないと考える。⁴¹

それではフィヒテが本書でその利益を代弁しようとしたのはいかなる「ブルジョアジー」のそれだったのであろうか。この問いには封鎖商業国家の示す社会像が回答を与えている。この社会は生産者、職人、商人の三身分を基本構成員とし、フィヒテ的な意味に於ける財産を全構成員が所有し、この財産に基づいて全構成員が労働し、かくして全構成員が平等に快的に生活する社会、何人も特に富むこともできぬが、また、零落する人もあり得ない社会、無所有者たる近代プロレタリアートの存在を許さないし、従って資本家の存在も許されない社会であって、たとえフィヒテ自身に於いてはそれが普遍妥当な理念として意識されていたとしても、この社会は一言でいえば小ブルジョアジーの共同体社会に他ならない。フィヒテは、従って近代資本主義の担い手としてのブルジョアジーではなく、

小ブルジョアジーの利益を代弁したのである。ドイツの封建的社会を変革して小ブルジョアの共同体社会を実現し、そしてそれをあくまで小ブルジョアの共同体社会に押し留めようとしたのである。これがフィヒテの理念の一つの基本的性格であると私は考える。⁴²⁾

先の節で残しておいた問題、即ち一方で断固とした反封建の立場をつらぬきながら他方ではプロイセン絶対主義にフィヒテが接近する、しかも政治的変節としてでなく——彼程こうしたことに無縁な人はいない——自己の信念の一貫した発展の結果として接近するに至ったのは何故かという問題の理由の一つもここに根ざしているのだと私には思われる。というのはフィヒテにとって最大の問題は小所有者の平等社会＝小ブルジョアジーの共同体社会の実現なのであるが、しかしこの小ブルジョアジーがドイツに於いて現実に果たしていた役割はあまりにもみじめなものだったからである。歴史的現実存在としてのドイツの小ブルジョア層は、エンゲルスによれば、「正常の歴史的形相ではなくて、極度に誇張された戯画、一個の変質物であって、……イギリス、フランス等の小ブルジョア層は決してドイツのそれと同一水準に立つものではない」⁴³⁾のである。「ドイツでは、小ブルジョア層は挫折した革命（大農民戦争の敗北）の産物であり、発展が中断され、おしかえされたための産物であり、30年戦争とそれに続く時代…を通じて怯懦、偏狭、孤立無縁、いっさいの創造性への無能力という独得の、変態的な性格を持ち続けた。上の性格は歴史的運動がその後再度ドイツをつかんだ時でもそのまま残った」⁴³⁾のであった。フィヒテが眼前にしていたのはこのようなドイツの小ブルジョア層なのであって、従って彼にとっては現実変革の力をこのドイツ小ブルジョア層自身に求めることはできなかったであろう。しかも他方では、既にふれたようにフランス大革命、特にジャコバン派独裁の理論

的総括を通じて国家の位置づけを変えたのがこの期のフィヒテである。この国家論の変化が絶対主義国家への接近をもたらした一つの原因ではあるが、しかし同時に社会変革の力を絶対主義国家による“上からの改革”に期待せざるを得なかったのは上述のドイツ小ブルジョア層の歴史的現実もその一因となっているのではないであろうか。勿論フィヒテに於いてはフリードリヒ体制の国家への接近は厳密な理論的形態をとって現われるが、その接近そのものの根源の一つは、フィヒテがその利益の代弁者であったドイツ小ブルジョア層自身の状況に規定されたものと私には思われるのである。

3. フィヒテと社会主義 ——結論にかえて——

フィヒテの『封鎖商業国家』の理念がドイツに於ける最初の近代的社会主義思想であるか否かの問題は、実はそれを判断する側の社会主義概念の問題でもある。例えば マリアンネ・ウェバーの場合は「最も広義における社会主義概念」⁴⁴⁾即ち「個人の全体に対する、また個人相互の利害対立は経済的諸関係の結果であるとの前提から出発し、そこにおいては諸個人に対し全体の中でのその社会的地位を決定するものが従来の所有配分と私的経済経営に基づく経済力だけではないような一つの社会秩序の成立を期待し、追求し、または理論的に構想するところの、法哲学的・経済的理論または運動」⁴⁴⁾という概念内容に基づいて「倫理的社会主義」と規定したのである。また南原繁氏の場合も社会主義概念を「広義に考え、すべての人が社会的労働に参与し、且つ、それに応じておのおのその労働の成果の享有に与ること、その意味において万人平等の権利と義務を有するに至り、かようにして全体の成員の一部が他の成員によって搾取されるごときのない社会的秩序の要請」⁴⁵⁾ととらえ、そのうえで「学说的社会主義」、「文化的社会主

義」と規定している。これらの議論に於いては、生産手段の社会的所有或いは私的所有の廃絶といった社会主義思想の周知のメルクマールさえ捨象されてしまっている。しかし真の問題は、ここまで概念内容を拡大してフィヒテの思想を“社会主義”と規定することで、どこまでフィヒテの思想そのものの本質を表現し得ているかということであろう。この点については私は大いに疑問とせざるを得ないのである。私の上述の理解から言えば、フィヒテの思想を小ブルジョアの思想と捉えること、さらには小ブルジョアの平等主義に基づく社会構想のドイツの形態と捉えることにより、彼の思想の本来具有していた積極的内容及びその限界をより端的に表現しようとするのである。積極的内容とは人間的自由から『封鎖商業国家論』まで、即ち抽象的一般的人間規定から最も具体的な人間存在のあり方に至るまで首尾一貫した理論的展開のもとに小ブルジョアの利益が普遍妥当な全人類的価値を有するものと主張され、且つ、封建的・反動的諸勢力の様々な抑圧に抗してそれを決然として守りぬいたことに集約されると私は考える。そしてまたこのように小ブルジョア層の利益が普遍妥当なものとして主張されること自体が当時のドイツの思想的・社会的状況に対応するものであった。即ちドイツは当時はまだ市民革命・産業革命以前の段階にあり、ドイツ小ブルジョア層は、そのみじめさを含めて、当時のドイツにおける「標準的階級」^{④⑥}だったのである。フィヒテはフランスに於ける小ブルジョア層の歴史的役割に依拠することでドイツ的なみじめさを克服しつつドイツの変革を展望しようとしたのである。フランスの小ブルジョア平等主義がバブーフ主義を産み出したとすれば、^{④⑦}ドイツのそれが産み出したのがフィヒテの『封鎖商業国家』であり、両者の内容の相違は一方が市民革命を経、他方はまだそれ以前にある点に集約される歴史的位相の差位によるのであろう。ま

た最初に述べたフィヒテ像の多様性を産み出した原因となったフィヒテ自身の思想的変遷はドイツ小ブルジョア層のおかれた歴史的条件的変化及びそれに対するフィヒテの対応という観点から一貫した理解が得られるのではないであろうか。またその限界とは、ドイツの資本主義化を見通すことはできなかったし、まして「社会的生産力を増大しつつしかも資本主義的搾取をのりこえる途をば見出し得なかった」^{④⑧}こと、また封鎖商業国家の理念の実現を絶対主義国家による上からの改革に期待せざるを得なかったことであり、これはこれでまた上述のドイツ小ブルジョアの状況に規定されていたと考えられる。しかし、最後に、彼の理念はそのためかえて資本主義的階級分化を一切捨象したうえで一種の共同体社会の構想を提出することになり、ここから後世社会主義思想と評価されうる様々な内容をも合わせ有するに至ったのだと考えられる。しかしその内容——国家による計画・統制経済、分配の平等、搾取を許さぬ労働の社会的分業等々——は、フィヒテに即していえば普遍妥当性を持つ内容であったとしても、歴史的にはやはりあくまでドイツに於ける小ブルジョアの平等社会実現の方策であったのだと私には思われる。

註

- ① Johnsen, H., *Das Staatsideal J. G. Fichtes*. (1929). なお Engelbrecht, H. C., *Johann Gottlieb Fichte. A study of his political writings with special reference to his Nationalism*. N.Y. (1933), p. 184 に依る。
エンゲルブレヒトは本書第8章・19世紀及び20世紀に於けるフィヒテ、で優れたフィヒテ研究史の叙述を与えており、本稿も多くを彼におっている。
- ② 隈元忠敬、「フィヒテ・ルネサンスの曙光」（『社会科学の方法』第11巻5号、お茶の水書房、1978年、8頁）
1977年8月に国際フィヒテ学会が結成され、新たな全集の編集がバイエルン・アカデミーによって1962年

以来進行中である。

なお、後期のフィヒテのみではなく前期のフィヒテ研究も新たな発展をみせようとしていることについては小栗嘉浩「西ドイツに於ける最近のフィヒテ研究」(マンフレート・ブール、藤野渉、小栗嘉浩、福吉勝男訳『革命と哲学—フランス革命とフィヒテの本源の哲学—』法政大学出版局、1976年所収)に紹介がある。

- ③ Marianne Weber, *Fichtes Sozialismus und sein Verhältnis zur Marx'schen Doktrin.* (1925)

- ④ Engelbrecht, *op. cit.* 南原繁『フィヒテの政治哲学』岩波書店、1977年. Reinhold Aris, *History of political Thought in Germany 1789—1815*, N. Y. (1965). などはいずれも基本的にはフィヒテ思想をこの三段階(三側面)で把握しようとしている。

- ⑤ Fichte, J. G., *Der geschlossene Handelstaat. Ein philosophischer Entwurf als Anhang zur Rechtslehre und Probe einer künftig zu liefernden Politik.* (1800)

本書は副題にもあるとおり、来來は『自然法の基礎』(*Grundlage des Naturrechts nach Principien der Wissenschaftslehre*, 1796)の附録として出版されたもので両者の間には密接な関係がある。本稿では直接には『封鎖商業国家論』の分析を中心にするが必要なかぎり『自然法の基礎』にもふれていくことにしたい。

テキストとして使用したのは Johann Gottlieb Fichtes Werke, Herausgegeben von Immanuel Hermann Fichte, 8 Bde. (1845/1846). であって上記兩著作はともにその第三巻に収められている。以下の叙述で頁数のみを記した引用文は全て本書のものである。(また以後本全集をWerkeと略記し巻数を併記する)

なお訳書としては、出口勇蔵訳『封鎖商業国家論』引文堂書房、昭13年がある。

- ⑥ フィヒテの息子で先全集を編纂した I. H. フィヒテによれば、フィヒテは『封鎖商業国家論』について折りに触れて、たとえそれが同時代人の間で最小の賛成を見出し最大の嘲笑を招いたものではあったとしても自分の最良の最も考えぬかれた著作であると呼んでいたという。(S. XXXVIII.)

本書がフィヒテ自身の最も根本的要求を具体的な形で提出していると考え理由の一つもこうしたフィヒテ自身の本書の位置づけにある。

- ⑦ 南原繁、上掲書 200 頁。

- ⑧ Fichte, *Grundlage der Naturrechts*, § 9—12. なお南原繁、上掲書 184 頁以下参照。

- ⑨ 「この所有権はその権原を、即ちその法的拘束力を、ただ単に万人と万人…との契約の中にのみ持っている。」(S.444)「したがって…単に農民のみならず、また国家のすべての居住者は一つの排他的財産を所有しなければならない」。(S.446)農民はその財産として土地を所有することになるが、しかし職人、商人の場合のそれは土地ではない。彼らの場合は国家が「同一の労働部門を営む者の数を制限して、そのすべての人に対して必要な生計の獲得に配慮」(Ebenda)してやるべきであり「この制限によってはじめて、その労働部門はそれを営む階級の財産となるのである。」(Ebenda)。

- ⑩ 「彼のものを漸次助け得しむということが人為によって理性に近づかんとする国家の意図でなければならない。私が上に述べた、人各々に彼のものを与えることが国家の本分であるというのはこの謂だったのである。」(S.403)

- ⑪ この価値論については後にもう一度ふれる。(第2章第2節参照)

- ⑫ 「相争う商業利益は、たとえこれに他の口実を与えようとも、度々戦争の真の原因となる。」(S.468)ここではフィヒテは重商主義政策をきびしく批判しているのである。

- ⑬ 「場所と民族との凡ての相違を純粹に廃棄して、ひたすらに人間そのものに属する…ものは学問においては存在しない。…統一された人類の力によって学問を発展せしめるということが、人類の分離された地上の諸目的を尚更促進するものであるから、封鎖国家はその連関を幣助するであろう。」(S.512)

- ⑭ 『封鎖商業国家論』がフィヒテ思想の前期から後期への過渡期の作品とされるのは註⑬でみられるような前期に於けるコスモポリタニズムを含みつつも、ここにみられるような国民主義的主張が登場してくるからである。

- ⑮ Engelbrecht, *op. cit.*, p.36

- ⑯ Weber, M., a. a. O. S. 19.

- ⑰ 南原繁、上掲書 177 頁及び 232 頁。

- ⑱ Aris, R., *op. cit.*, p.124

彼はまた「この制度は個人のイニシャティヴには何らの余地も与えないものであって、正しく国家社会主義として叙述されている」(P.132)とも述べている。

- ①⑨ Jakob Baxa, *Einführung in die rowantische Staatswissenschaft*, Jena, (1923). S.68ff.

- ②⑩ Franz Mehring, *Geschichte der deutschen Sozialdemokratie* 4 Bde, Berlin (1960). I. Teil S.69

また高島善哉「フィヒテ「封鎖商業国」の一研究——特にリストの国民経済学体系に關聯して——」(『経済社会学の根本問題』日本評論社、昭16年所収)も同じ視点を有している。(429頁)

- ②⑪ Franz Mehring a.a.O. S.69. Aris, R., *op. cit.*, p.132

また少し視点は異なるがドイツ国民経済の形成との関係でフィヒテを位置づけようとする立場のものもここに入れることができるであろう。このような視点からのものとしては上記の高島善哉氏のものの他に、住谷一彦氏の所論(『経済学全集』3. 筑摩書房、『経済家史』第3章類型・「国民経済学の歴史と理論(Ⅱ)」)

桑康弘、「近代ゲマインシャフトと国民経済の構想——フィヒテ国家論の旋回——」(『ドイツ観念論の歴史的 성격』勁草書房、1978年所収)がある。

- ②⑫ Fichte, J. G., *Zurückforderung der Denkfreiheit von den Fürsten Europas, die sie bisher unterdrückten*. (1973). Werk—VI.

- ②⑬ 「汝ら君主は我々の思想の自由に対しては何らの権利——何が真であり何が偽であるかを決定する権利を有しない。我々の研究の対象を定め、或るいはその限界を設ける権利をもたない。また研究の結果が真理であろうと誤りであろうと、それを我々が誰にいかにして伝達するかについて妨げてはならない」(Ebenda, S.29)と述べ、さらに「汝ら君主の同胞は、単に国家のみでなくまた精神世界の成員であり、そこでは汝らは彼らより特別に高い地位を占めている訳ではない。…我々は知っている——その精神世界では万人が平等である。」(Ebenda, S.30f)と主張する。この主張は啓蒙専制君主にすら対立するものであることに注意。

- ②⑭ Fichte, J. G., *Baitrag zur Berichtigung*

der Urtheile des Publicums über die Französische Revolution, (1793).

Werke, VI. S.105.

- ②⑮ 「国家の中で生きるということは、たとえある非常に偉大な人物がそれについて何を言おうとも、人間の絶対的な目的には属さないものであり、それはただある完全な社会の創造のために一定の諸条件のもとでのみおこなわれる手段であるにすぎない。国家は、たんなる手段であるところのすべての人間的機構と同じようにそれ自身の廃絶をめざすのである。政府を余計なものにすることが政府の目的である。」(Fichte, J. G., *Bestimmung des Gelehrten*, (1794). Werke.—VI S.306)

- ②⑯ Fichte, J. G., *Grundlage des Naturrechts nach Principien der Wissenschaftslehre*, (1796). Werke. III. S.151

- ②⑰ 南原繁、上掲書。169頁以下参照

- ②⑱ 「フィヒテが『自然法論』、『道徳の体系』および『封鎖商業国家論』…において展開しているものは、たんに一つの国家構想のものだけではなくて、一つの革命的な、革命的—民主主義的な国家構想なのである。それは内容的には、その諸基礎において、ジャコバン国家と一致する。あるいは言い換えれば、フィヒテによって1796—1800年に展開された国家観は、その基本的な諸特色において、1793—94年のフランス革命政府の国家観に照応している。」(ブール、上掲書101頁)

エンゲルブレヒトもまた、ブールとならんで、フィヒテのこの国家論の変化とフランス革命の関係を強調している。「フランス革命がナショナリストのフィヒテを、また社会主義者フィヒテをもつくり出したのである。」(*op. cit.*, p.31)

- ②⑲ Werke III. S.286f.

- ③⑩ Ebenda, S.158.

- ③⑪ Ebenda, S.287.

- ③⑫ Ebenda, S.288.

- ③⑬ Ebenda, S.289. なおEngelbrecht, *op. cit.*, p.36ff. 参照。

- ③⑭ 高島善哉、上掲書429頁。

- ③⑮ Aris, R., *op. cit.*, p.132. アリスはここではナチズムに傾斜していったドイツの中産階級の歩みの思想的先駆者としてフィヒテをとらえているのである。

- ③⑯ 註②参照。

③⑦ 高島善哉、上掲書 402 頁。

③⑧ ここではフィヒテは農夫にとって不必要な金（＝無用の労働）と鉦夫にとって絶対必要な穀物（＝有用な労働）を対比しつつ「仮に何人かが無効の労苦を費したとしたならば、そもそも人間というものは、その人に対してその無効の労苦を有効な労苦で以って報いる義務があると自分で考えるものであろうか」（S.455）と述べて労働価値説を述べた「ある有名な著述家」（アダム・スミス？ S.454）に反論している。

③⑨ 「市民と他国の市民との直接の通商を許可したり前提したりするところのすべての制度は、根底に於いては、両市民を同じ一国の市民として考察しているのであって、はるか以前に廃棄された一つの制度の残滓であり結果であって、現代の世界に於いては適合しないところの過去の世界の部分である。」（S.453 f.）

④⑩ 高島善哉、上掲書 390 頁。

④⑪ 因みに、アダム・ミュラーの指摘した如く、本書には「資本」という語が一度も使用されていないのである。（出口勇蔵，上掲 翻訳書解説 62 頁の紹介に依る。）

④⑫ 「古典的市民革命の時期における小市民階級のドイツ的イデオログ」としてフィヒテを位置づけているのがブールである。（上掲書 44 頁）但しブールは、東ドイツのマルクス主義者として、フィヒテをあまりにも現代に強くひきつけて理解しすぎ、その結果彼をあまりにも強く革命家として描きすぎているように思われる。

④⑬ Engels, Fr., *Brief an Paul Ernst*,

(1890). *Werke*. 37 S.412 （国民文庫『マルクス・エンゲルス文学・芸術論』所収、81 頁）

④⑭ Weber, M., a.a.O. S. 1.

④⑮ 南原繁、上掲書 195 頁。

④⑯ Engels, Fr., *Der status quo in Deutschland*, (1847). *Werke*. 4. Bd. (1969). S.51 （大月版全集 4 巻 48 頁。）

④⑰ バブーフ主義については柴田三千雄『バブーフの陰謀』（岩波書店 1968）、平岡昇『平等に憑かれた人々——バブーフとその仲間たち』（岩波新書 852. 1973）を参照。

バブーフの思想とフィヒテの思想の間には多くの一致点がある。経済的自由主義の否定、統制経済による平等の実現、職能身分制による分業と全市民の労働の義務、外国貿易の国家による独占・封鎖、またともにルソーを出発点としていること等々。しかし一方は私有財産制を否定し革命的独裁論を含む共産主義的革命理論であるのに対し他方は市民に私有財産を与えるための上からの改革構想であるなど基本的相違も存在する。バブーフ主義のフィヒテへの影響があったのかどうかという問題に関しては直接的影響を受けたと主張しうる積極的証拠が現在まで発見されていないので、依然としてマリアンネ・ウェーバーの以下の結論以上の事は言えないようである。

「専門的な個々の点に於いて両者の間に諸々の類似点が存するのであるから、フィヒテが平等主義者の陰謀及びバブーフの共産主義的理論について知っていたということはあり得ないことではない。」（a. a. O. S.18.）

④⑱ 桑康弘、上掲書 172 頁。